

博士論文（要約）

論文題目 新古今時代の和歌の研究

氏名 板野 みずえ

# 目次

凡例	1 頁
序章 「新古今」という時代	2 頁
第1篇 藤原良経の和歌活動	
第1章 藤原良経の和歌と寂蓮	13 頁
第2章 藤原良経の「風」の歌	27 頁
第3章 「心の空」と叙景意識	41 頁
付章 藤原良経の歌壇活動	54 頁
第2篇 新古今時代の和歌における時間表現	
第1章 新古今時代の和歌における「春の曙」	68 頁
第2章 新古今歌人の時間表現	85 頁
第3篇 新古今時代の和歌における叙景表現	
第1章 新古今時代の恋歌における叙景表現	100 頁
第2章 新古今時代の和歌と『源氏物語』	114 頁
第3章 新古今時代の和歌における「ながむ」	124 頁
終章 新古今から玉葉・風雅へ	138 頁
付論 東京大学総合図書館蔵『月清集攷』	147 頁
初出一覧	164 頁

# 本文

博士論文の全部が、すでに出版契約がされていて全文公表できません。

書誌事項は下記のとおりです。

- ・ 著者名：板野みずえ
- ・ 題名：新古今時代の和歌表現
- ・ 出版社：花鳥社
- ・ 出版年（予定）：2024年
- ・ ISBN：978-4-909832-84-9

# 参考文献一覧

## 序章

- 島津忠夫『日本文学史を読む——万葉から現代小説まで——』（世界思想社、1992年）
- 風巻景次郎『新古今時代』（塙書房、1955年、後に『風巻景次郎全集』第6巻（桜楓社、1971年）に所収）「萬葉古今新古今三集の定位」
- 藤平春男『新古今歌風の形成』（明治書院、1969年）第1章I「新古今時代歌壇の範囲」
- 久保田淳「中世和歌史素描」（『中世和歌史の研究』明治書院、1993年）
- 渡邊裕美子『新古今時代の表現方法』（笠間書院、2010年）「はじめに」
- 尾上柴舟『新評古今と新古今』（弘道館、1929年）
- 谷宏「新古今集——古代の落日」（『文学』第17巻6号、1949年6月）
- 小島吉雄『増補新古今和歌集の研究 続編』（和泉書院、1993年）第4章・3「新古今集に於ける象徴的表現と後鳥羽上皇」
- 村尾誠一『中世和歌史論 新古今和歌集以後』（青簡舎、2009年）序章「和歌史における中世——その始発期をめぐって」
- 田淵句美子「『新古今和歌集』の成立」（『文学』第8巻第1号、2007年1月）
- 久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、1973年）
- 久保田淳『中世和歌史の研究』（明治書院、1993年）
- 寺田純子『古典和歌論集』（笠間書院、1984年）
- 大岡賢典「藤原良経（一）」「藤原良経（二）」（『流通経済大学論集』第18巻1号、第25巻3号、1983年7月、1991年2月）、「定家と良経——新古今の前衛と後衛」（和歌文学会編『論集 藤原定家』笠間書院、1988年）、「後京極良経再考——定家との伊勢行の詠をて

がかりに」(『国文学 解釈と教材の研究』第42巻13号、1997年11月)  
 谷知子『中世和歌とその時代』(笠間書院、2004年)  
 和歌文学大系9 谷知子・平野多恵『秋篠月清集／明恵上人歌集』(明治書院、2013年)  
 田淵句美子『中世初期歌人の研究』(笠間書院、2001年)第2章「藤原良経」  
 小山順子「藤原良経の本歌取り凝縮表現について——『後京極殿御自歌合』を中心に」  
 (『国語国文』第70巻5号、2001年5月)、「藤原良経の本歌取りと時間——建久期の詠  
 作から」(『和漢語文研究』第7号、2009年11月)、「本歌の否定——藤原良経『正治初度  
 百首』をめぐる」(『山辺道』第53号、2011年3月)、「藤原良経「吉野山花のふる里」  
 考」(大取一馬編『日本文学とその周辺』思文閣出版、2014年)、コレクション日本歌人選  
 27『藤原良経』(笠間書院、2012年)  
 大野順子『新古今前夜の和歌表現研究』(青簡舎、2016年)  
 片山享『校本秋篠月清集とその研究』(笠間書院、1976年)  
 青木賢豪『藤原良経全歌集とその研究』(笠間書院、1976年)  
 安藤勝志「藤原良経の隠者的姿勢」(『愛知大学国文学』第7号、1966年3月)  
 脇谷英勝「藤原良経の人生詠の考察——その本質と中世的意味」(『日本文芸学』第8号、  
 1973年10月)  
 稲田利徳「西行と良経」(『中世文学研究』第13号、1987年8月、後に『西行の和歌の世  
 界』(笠間書院、2004年)に所収)  
 谷知子「藤原良経の隠遁志向について」(『国語と国文学』第68巻第6号、1991年6月、  
 後に『中世和歌とその時代』(笠間書院、2004年)に所収)  
 大岡賢典「藤原良経の漢詩的なものはたらき——初学期の連句を中心にして」(和漢比  
 較文学叢書13『新古今集と漢文学』汲古書院、1992年)、「良経家房旧宅を過ぎ独吟の  
 事」から——新古今時代の漢詩の一齣の性格」(『立教大学日本文学』第68号、1992年7  
 月)  
 見尾久美恵「良経の「蓋和漢之詞、同類相求之故也」について」(『解釈』第47巻9・10  
 号、2001年10月)  
 大森生恵『『三十六番相撲立詩歌』について——良経の「漢詩と和歌」の意識』(『赤羽淑  
 先生退職記念論文集』赤羽淑先生退職記念の会、2005年)  
 小山順子「藤原良経の漢詩文摂取——初学期から「二夜百首」へ」(『国語国文』第74巻9  
 号、2005年9月)、「藤原良経『六百番歌合』恋歌における漢詩文摂取」(『和歌文学研究』  
 第89号、2004年12月)、「藤原良経「西洞隠士百首」考——四季歌の漢詩文摂取を中心  
 に」(『人文知の新たな総合に向けて：21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元  
 的人文学の拠点形成」第2回報告書4(文学篇1(論文))』2004年3月)、「藤原良経『正治  
 初度百首』考——漢詩文摂取の方法をめぐる」(『山辺道』第51号、2008年2月)  
 谷知子「新古今歌人の十如是の和歌について——九条家の舍利講を舞台として」(『語文  
 (大阪大学)』第59号、1992年10月)、「九条家の舍利講と和歌」(『中世文学』第37号、  
 1992年6月(いずれも後に『中世和歌とその時代』(笠間書院、2004年)に所収)  
 石川一『慈円和歌論考』(笠間書院、1998年)第2章第2節「良経歌壇の幕開け——花月

百首と西行思慕」

鈴木日出男「古代和歌における心物対応構造——万葉から平安和歌へ」（『国語と国文学』第47巻第4号、1970年4月、後に『古代和歌史論』（東京大学出版会、1990年）に補訂所収）

伊藤高広「京極派の時間意識」（『青山語文』第18号、1988年3月）

伊藤伸江「京極派和歌の時間表現——『為子集』『親子集』『兼行集』の意識から——」（『国語と国文学』第74巻第9号、1997年9月、後に『中世和歌連歌の研究』（笠間書院、2002年）に補訂所収）

見尾久美恵「和歌に見られる「暮る」の表現——新古今歌人の時間意識——」（赤羽淑先生退職記念の会編『赤羽淑先生退職記念論文集』赤羽淑先生退職記念の会、2005年）

久保田淳「『玉葉和歌集』とその文学史的位相」（『中世和歌史論』明治書院、1993年）

谷知子「『六百番歌合』から『玉葉集』『風雅集』へ——建久期新風和歌のゆくえ——」（『国文学 解釈と教材の研究』第39巻第13号、1994年11月、後に『中世和歌とその時代』（笠間書院、2004年）に所収）

村尾誠一「中世和歌における京極派的なるもの——二条派和歌との接点からの試論——」（『東京外国語大学論集』第75号、2008年3月）

神作研一「〈実景論〉をめぐって——香川景樹歌論の位相——」（『雅俗』第7号、2000年1月）

鈴木日出男「叙景歌」（犬飼廉ほか編『和歌大辞典』明治書院、1986年）

島津忠夫「入日を洗ふ沖つ白波——見様体の歌の展開にふれて——」（『和歌文学史の研究』角川書店、1997年）

## 第1篇

### 第1章

久曾神昇『寂蓮・顕昭』（三省堂、1942年）

半田公平『寂蓮法師全歌集とその研究』（笠間書院、1975年）、『寂蓮の研究』（勉誠社、1996年）、『寂蓮 人と文学』（勉誠出版、2003年）、『寂蓮研究 家集と私撰和歌集』（新典社、2006年）

西村啓子「新古今歌人の物語受容——寂蓮の源氏物語受容について——」（『女子大國文』第84号、1978年12月）

植木朝子「寂蓮と今様」（『中世文学』第41号、1996年6月、後に『梁塵秘抄とその周縁 今様と和歌・説話・物語の交流』（三省堂、2001年）に所収）

浅田徹「定家と寂蓮」（『日本古典文学会々報』第129号、1997年7月）

安井重雄「寂蓮と顕昭」（片桐洋一編『王朝文学の本質と変容 韻文編』（和泉書院、2001年、後に『藤原俊成 判詞と歌語の研究』（笠間書院、2006年）に所収）

山本一「寂蓮のいわゆる「無題百首」再考」（藤岡忠美先生喜寿記念論文集刊行会編『古

- 代中世和歌文学の研究』和泉書院、2003年)
- 櫻田芳子「文治五年秋、良経・慈円・寂蓮の贈答歌について」(『言語・文学研究論集(白百合女子大学)』第4号、2004年4月)
- 久保田淳『新古今歌人の研究』(東京大学出版会、1973年)
- 松野陽一『鳥帚 千載集時代の和歌の研究』(風間書房、1995年)
- 小山順子『『最勝四天王院障子和歌』の歌枕表現——「名所の景気并に其の時節」をめぐって』(『国語国文』第72巻9号、2003年9月)
- 浅田徹「寂蓮の和歌を読む」(『語文(日本大学)』第123号、2005年12月)
- 安井重雄「寂蓮の風情小考」(『国文学論叢』第33号、1988年3月、後に『藤原俊成 判詞と歌語の研究』(笠間書院、2006年)に所収)
- 石川常彦「「見渡せば」考——第三句「見渡せば」の新古今への変遷——」(『武庫川国文』第4号、1972年3月、「続「見渡せば」考——初句「見渡せば」の新古今への変遷」(『武庫川女子大学紀要』第19号、1972年10月(ともに、後に『新古今的世界』(和泉書院、1986年)に所収)
- 樺沢綾「「霞のまよりながむれば」の表現構造——『新古今集』三五番の実定の歌の解釈」(『武庫川国文』第67号、2006年3月)、「結題における「うへ(上)」「ま(間)」」(『鳴尾説林』第13号、2006年2月)
- コレクション日本歌人選49 小林一彦『鴨長明と寂蓮』(笠間書院、2012年) 解説「激動・争乱の時代の芸術至上主義」
- 川平ひとし「軒に夢みる——中世和歌における〈視点〉」(『國學院雑誌』第92巻1号、1991年1月、後に『中世和歌論』(笠間書院、2003年)に所収)
- 中川博夫「京極派和歌の一面覚書——〈軒〉をとおして」(『徳島大学国語国文学』第5号、1992年3月)
- 稲田利徳「「軒端の山」考——中世和歌の隠遁的措辞の形成——」(『国語国文』第69巻第8号、2000年8月)
- 近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』(風間書房、2005年) 第1章第2節「「見渡せば」と「眺望」詩」
- 久保田淳『新古今歌人の研究』(東京大学出版会、1973年) 第3篇第2章第4節・3「老若五十首と句題五十首」
- 伊藤高広「京極派の時間意識」(『青山語文』第18号、1988年3月)
- 中川博夫「京極派和歌の一面覚書(二)——〈間〉の歌の考察——」(『徳島大学国語国文学』第10号、1997年3月)
- 伊藤伸江「京極派和歌の時間表現——『為子集』『親子集』『兼行集』の意識から」(『国語と国文学』第74巻第9号、1997年9月、後に『中世和歌連歌の研究』(笠間書院、2002年)に所収)
- 松浦朱実「京極派の叙景歌——遠景の構図——」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊(文学・芸術学)』第13号、1987年1月)
- 樺沢綾「歌語「すゑ」の表現空間——万葉から新古今へ——」(『武庫川国文』第65号、2005年3月)

鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会、1990年）第1篇第7章「赤人の叙景の構図」

吉野朋美「後鳥羽院の和歌活動初期と寂蓮」（『中世文学』第50号、2005年6月、後に『後鳥羽院とその時代』（笠間書院、2016年）に所収）

## 第2章

水田えり子「藤原良経の歌風——「風」の歌を中心に——」（『就実語文』第9号、1988年11月）

見尾久美恵「新古今時代の「風」（二）——「風+動詞の連用形+て」の形態」（『清心語文』第3号、2001年8月）

神谷かをる「「風の音にぞ」と漢詩文——万葉集から王朝和歌へ——」（片桐洋一編『王朝の文学とその系譜』和泉書院、1991年）

三木雅博「風の音の系譜」（『平安詩歌の展開と中国文学』和泉書院、1999年）

小山順子「「風の声」の表現——和歌における「おと」「こゑ」試論」（『京都大学国文学論叢』第6号、2001年6月）

谷知子「新古今歌人の「消失」を詠んだ歌群について——イメージの重層法の形成——」（『国語と国文学』第63巻第12号、1986年12月）、「『六百番歌合』の「残春」「暮秋」の歌——御子左家と六条藤家」（『国文学 解釈と鑑賞』第72巻5号、2007年5月）

久保田淳「『六百番歌合』を読む」（『中世和歌史の研究』明治書院、1993年）

小山順子「藤原良経の本歌取りと時間——建久期の詠作から——」（『和漢語文研究』第7号、2009年11月）、「『最勝四天王院障子和歌』の歌枕表現——「名所の景気并に其の時節」をめぐって——」（『国語国文』第72巻9号、2003年9月）

赤羽淑「定家の否定的表現」（『ノートルダム清心女子大学紀要』第1巻1号、1977年3月、後に『藤原定家の歌風』（桜楓社、1985年）に所収）

川平ひとし「「ただ」の修辞——良経歌一首の形成と享受——」（『跡見学園女子大学国文学科報』第20号、1992年3月）

本間洋一『本朝無題詩全注釈』2（新典社、1993年）

## 第3章

清水克彦「情と景——叙景歌とその周辺——」（『萬葉』第65号、1967年10月）

渡部泰明「叙景という幻想」（『江戸文学』第27号、2002年11月）

小林一彦「叙景歌とは何か」（浅田徹ほか編集『和歌の図像学』岩波書店、2006年）

鈴木日出男「古代和歌における心物対応構造——万葉から平安和歌へ——」(『国語と国文学』第47巻第4号、1970年4月、後に『古代和歌史論』(東京大学出版会、1990年)に補訂所収)

久保田淳『藤原定家全歌集』下(筑摩書房、2017年)

茅原雅之「家隆における西行歌受容考——「心の果」と「しのぶの奥」——」(『日本大学人文科学研究所研究紀要』第58巻、1999年10月)

半沢幹一「古代和歌における「こころ」の空間化表現」(『国語学研究』第34号、1995年3月)

黒川昌享「心象風景表現と新古今歌風」(『中世文芸五十号記念論集』広島中世文芸研究会、1973年)

樺沢綾「歌語「心のそこ」——西行および文治建久期の慈円と定家——」(『武庫川国文』第64号、2004年11月)

川平ひとし「〈心〉のゆくえ——中世和歌における〈主体〉の問題——」(『国語と国文学』第81巻第5号、2004年5月、後に『中世和歌テキスト論 定家へのまなざし』(笠間書院、2008年)に所収)

寺島恒世「歌語「奥」考」(『国語国文』第56巻10号、1987年10月、後に『秘儀としての和歌—行為と場』(有精堂、1995年)に所収)

和歌文学大系9 谷知子・平野多恵『秋篠月清集／明恵上人歌集』(明治書院、2013年)

片山享「心のそらぞ秋ふかくなる——良経花月百首の歌の検討——」(『甲南国文』第26号、1979年3月)

久保田淳・吉野朋美校注『西行全歌集』(岩波書店、2013年)

井上宗雄校注・訳『中世和歌集』(小学館、2000年)

久保田淳・山口明穂校注・訳『六百番歌合』(岩波書店、1998年)

## 付章

松野陽一「平安末期の百首歌について」(『東北大学教養部紀要』第25号、1977年2月、後に『鳥帚——千載集時代和歌の研究』(風間書房、1995年)に所収)

田中正男「題詠に於ける結題の隆盛とその詠歌法」(『國學院大大学院文学研究科論集』第5号、1978年3月)

久保田淳『藤原家隆集とその研究』(三弥井書店、1968年)

半田公平『寂蓮法師全歌集とその研究』(笠間書院、1975年)

松野陽一『鳥帚——千載集時代和歌の研究』(風間書房、1995年)

田村柳壺『後鳥羽院とその周辺』(笠間書院、1998年) VI・1 「歌題の形成」

篠崎祐紀江「六百番歌合」歌題考——四季の部をめぐって——」(『国文学研究』第70号、1980年3月)

大岡賢典「定家と良経——新古今の前衛と後衛——」(和歌文学会編『論集 藤原定家』笠間書院、1988年)



- 小山順子『最勝四天王院障子和歌』の歌枕表現——「名所の景気并に其の時節」をめぐって——（『国語国文』第72巻9号、2003年9月）
- 谷知子「新古今歌人の「消失」を詠んだ歌群について——イメージの重層法の形成」（『国語と国文学』第63巻第12号、1986年12月）
- 有吉保『新古今集の研究 基盤と構成』（三省堂、1968年）第2編第1章「四季部の構成と特質」
- 鹿目俊彦「風雅集の一考察——特に秋部の歌材をめぐって——」（『語文(日本大学)』第19号、1964年10月）
- 安田純生「竜田川の柳」（『白珠』第53巻9号、1998年9月、後に『歌枕の風景』（砂子屋書房、2000年）に所収）
- 渡邊裕美子『最勝四天王院障子和歌全釈』（風間書房、2007年）解説
- 谷知子『『六百番歌合』の「残春」「暮秋」の歌——御子左家と六条藤家』（『国文学 解釈と鑑賞』第72巻5号、2007年5月）
- 近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』（風間書房、2005年）第1章第1節
- 佐々木孝浩「中世歌合諸本の研究（二）——正治二年九月三十日院当座歌合を中心に、撰政家月十首歌合におよぶ・附校本——」（『斯道文庫論集』第33巻、1999年2月）
- 津村正「鳥羽・後白河院期の歌会での題者の在り方」（『和歌文学研究』第65号、1993年3月）

## 第2篇

### 第1章

- 上野理「春曙」考（『文芸と批評』第2巻8号、1968年4月）
- 高橋介「春のあけぼの 秋のゆふぐれ——新古今歌人の一視座——」（『文学史研究（大阪市立大学）』第20号、1980年8月）
- 森野宗明「いわゆる美的語彙の一考察——「春の曙」・「秋の夕暮」系の歌語をめぐって」（『日本語学』第7巻11号、1988年11月）
- 上野辰義「春はあけぼの」と「春のあけぼの」——枕草子第一段雑考——」（『京都語文』第8号、2001年10月）
- 有吉保『新古今和歌集の研究 基盤と構成』（三省堂、1968年）
- 久保田淳『『六百番歌合』を読む』（『中世和歌史の研究』東京大学出版会、1993年）
- 安井重雄『藤原俊成 判詞と歌語の研究』（笠間書院、2006年）Ⅱ・第9章「俊成の歌合判詞の特質」
- 谷知子『中世和歌とその時代』（笠間書院、2004年）第3章第3節『『六百番歌合』の歌ことば——新古今前夜から京極派へ——』
- 久保田淳「藤原俊成の「あけぼの」の歌について——歌ことば「あけぼの」に関連して——」（『日本学士院紀要』第70巻第1号、2015年10月）
- 川崎若葉「藤原良経『後京極殿御自歌合』の考察」（『香椎潟』第41号、1996年3月）

小山順子「藤原良経の本歌取りと時間——建久期の詠作から——」（『和漢語文研究』第7号、2009年11月）

久保田淳・山口明穂校注『六百番歌合』（岩波書店、1998年）

石川一・広島和歌文学研究会編『後京極殿御自歌合・慈鎮和尚自歌合全注釈』（勉誠出版、2011年）

岩佐美代子『風雅和歌集全注釈』中（笠間書院、2003年）

コレクション日本歌人選27・小山順子『藤原良経』（笠間書院、2012年）

木船重昭『六百番歌合全釈』（私家版、2000年）

次田香澄・岩佐美代子校注『風雅和歌集』（三弥井書店、1974年）

久保田淳『藤原定家全歌集』上・下（筑摩書房、2017年）

近藤潤一ほか『初学百首 藤原定家拾遺愚草注釈』（桜楓社、1978年）

久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、1973年）第3篇第2章第1節2「初学百首と堀河題百首」

小林強「新古今三夕および風雅集三曙四雪について」（『解釈』第32巻9号、1986年9月）、「（翻刻）風雅集三曙四雪之口訣」（『常照』第28号、1987年7月）

渡部泰明『中世和歌の生成』（若草書房、1999年）第2章第3節「艶と六百番歌合」

『拾遺愚草古注』上・中（三弥井書店、1983年、1986年）

鹿目俊彦『風雅和歌集の基礎的研究』（笠間書院、1986年）附「雑部歌題の特質」

渡部泰明「藤原定家の方法」（『文学 隔月刊』第12巻第1号、2011年1月、後に『中世和歌史論』（岩波書店、2017年）に所収）

大岡賢典「定家と良経——新古今の前衛と後衛——」（和歌文学会編『論集藤原定家』笠間書院、1988年）

海老原昌宏「良経と時間」（『日本文学論究』第58号、1999年3月）

赤羽淑「藤原定家の歌における「時間」（東北大学文学部国文学研究室編『北住敏夫教授退官記念日本文芸論叢』笠間書院、1976年）

中川博夫「中世和歌表現史試論」（『国語と国文学』第93巻第12号、2016年11月）

鹿目俊彦「「秋曙」雑考——永福門院内侍の歌から——」（『日本文学』第27巻第2号、1978年2月）

## 第2章

稲田利徳「新古今集の「古」と「今」——「むすぼほる」世界——」（『和歌文学論集』編集委員会編『新古今集とその時代』風間書房、1991年）

峯村文人校注・訳『新古今和歌集』（小学館、1995年）

田中裕・赤瀬信吾校注『新古今和歌集』（岩波書店、1992年）

久保田淳『新古今和歌集全注釈（一）』（角川学芸出版、2011年）

- 小迫喜美子『源氏物語』——「結ぼほる」について——（『広島女学院大学国語国文学誌』第9号、1979年12月）
- 大森純子「源氏物語の内的表現の方法——薄雲・朝顔のころ——」（『物語研究』第2号、1980年8月）
- 小西茂章「むすぼほれたまはぬ煙——源氏物語の表現——」（『国文学研究ノート』第30号、1996年1月）
- 清水婦久子『源氏物語の巻名と和歌』（和泉書院、2014年）第1章4「むすぼほる」朝顔」
- 高田祐彦「身のはての想像力——柏木論の断章——」（『日本文学』第43巻6号、1994年6月）
- 佐竹弥生「女三宮と柏木の贈答について——おくるべうやは——」（『平安文学研究』第64輯、1980年12月）
- 和歌文学大系12・村尾誠一『新続古今和歌集』（明治書院、2001年）
- 和歌文学大系24・寺島恒世『後鳥羽院御集』（明治書院、1997年）
- 清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』（和泉書院、1999年）第2章第5節「朝顔巻の女君」
- 三田村雅子「鬱屈のかたち——源氏物語の「むすぼほれ」から——」（『礫』210号、2004年4月）
- 中川英子『明日香井和歌集全釈』（溪声出版、2000年）
- 和歌文学大系9 谷知子・平野多恵『秋篠月清集／明恵上人歌集』（明治書院、2013年）
- 久保田淳『藤原定家全歌集』上・下（筑摩書房、2017年）
- 佐藤恒雄「新古今的表現成立の一樣相（続）——「露のそこなる」をめぐる——」（『中世文学』第4号、1978年7月）
- 谷知子「新古今歌人の「消失」を詠んだ歌群について——イメージの重層法の形成」（『国語と国文学』第63巻12号、1986年12月）
- 渡部泰明「源氏物語と新古今和歌」（紫式部学会編『源氏物語とその享受』武蔵野書院、2005年）
- 久保田淳・山口明穂校注『六百番歌合』（岩波書店、1998年）
- 阿部秋生ほか校注・訳『源氏物語』②（小学館、1995年）
- 柳井滋ほか校注『源氏物語』2（岩波書店、1994年）
- 清水好子・石田穰二校注『源氏物語』3（新潮社、1978年）
- 北原白秋・折口信夫編鑑賞短歌大系18『實朝・良經読本』（学芸社、1942年）
- 玉上琢彌『源氏物語評釈』第4巻（角川書店、1965年）

### 第3篇

#### 第1章

久保田淳『新古今和歌集全注釈（四）』（角川学芸出版、2012年）  
久保田淳・山口明穂校注『六百番歌合』（岩波書店、1998年）  
コレクション日本歌人選11・村尾誠一『藤原定家』（笠間書院、2011年）  
峯村文人校注・訳『新古今和歌集』（小学館、1995年）  
田中裕・赤瀬信吾校注『新古今和歌集』（岩波書店、1992年）  
久保田淳「憂かりける人を初瀬の」（『短歌往来』2016年7月号、ながらみ書房）  
日野龍夫「宣長と過去の助動詞」（『江戸文学』第5号、1991年3月）  
山口明穂「国語史よりみた『六百番歌合』（久保田淳・山口明穂校注『六百番歌合』岩波書店、1998年）  
和歌文学大系37・佐藤恒雄『続後撰和歌集』（明治書院、2017年）  
天理図書館善本叢書『新古今和歌集 烏丸本』上・下（八木書店、1974年）  
尊経閣叢刊『新古今和歌集 前田本』1～4（育徳財団、1930年）  
笠間影印叢刊『新古今和歌集 穂久邇文庫蔵 伝二条為氏筆』上・下（笠間書院、1971年）  
冷泉家時雨亭叢書『新古今和歌集 文永本』（朝日新聞社、2000年）  
吉岡曠「作者のいる風景」（『武蔵野文学』第14号、1967年2月、後に『作者のいる風景 古典文学論』（笠間書院、2002年）に所収）  
久保田淳「源経信の和歌について」（『山岸徳平先生頌寿中古文学論考』（有精堂、1972年）、後に『中世和歌史の研究』（明治書院、1993年）に所収）  
安田徳子『中世和歌研究』（和泉書院、1998年）第1章第1節・2「旅人のいる風景——中世的表現の形成——」

## 第2章

寺本直彦『源氏物語受容史論考』正篇・続篇（風間書房、1970年、1984年）  
渡部泰明「源氏物語と中世和歌」（鈴木日出男編『文学史上の『源氏物語』』至文堂、1998年）  
松村雄二「源氏物語歌と源氏取り——俊成「源氏見ざる歌よみは遺恨の事」前後」（源氏物語研究集成第14巻『源氏物語享受史』風間書房、2000年）、『源氏物語』と中世和歌（講座源氏物語研究4『鎌倉・室町時代の『源氏物語』』おうふう、2004年）  
加藤睦「源氏物語と中世和歌」（加藤睦・小嶋菜温子編『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』世界思想社、2009年）  
寺島恒世「新古今時代の源氏物語受容」（『国語と国文学』第88巻4号、2011年4月、後に『後鳥羽院和歌論』（和泉書院、2015年）に所収）

- 田仲洋己『『源氏物語』と新古今時代——和歌史の一齣——』（『新時代への源氏学 8〈物語史〉形成の力学』竹林舎、2016年）
- 渡部泰明「源氏物語と新古今和歌」（古代文学論叢第16輯『源氏物語とその享受：研究と資料』武蔵野書院、2005年）
- 田仲洋己「建久元年『一字百首』と『一句百首』について」（『中世前期の歌書と歌人』笠間書院、2008年）
- 久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会、1973年）第3篇第2章第3節・2「速詠の流行」
- 田村柳壺「中世百首歌三種についての覚書——一句百首・鹿百首・伏見院御百首——」（『語文（日本大学）』第61輯、1985年2月、後に『後鳥羽院とその周辺』（笠間書院、1998年）に所収）
- 山本一「速詠の季節——文治後半の慈円と周辺——」（『講座平安文学論究1』風間書房、1984年、後に『慈円の和歌と思想』（和泉書院、1999年）に所収）
- 安藤宏・高田祐彦・渡部泰明『日本文学の表現機構』（岩波書店、2014年）、渡部泰明 II ふるまい 第5章「縁語的思考」
- 蔡雅如「「空閉づ」考——『源氏物語』から定家へ——」（『フェリス女学院大学日文学院紀要』第19号、2012年3月）
- 赤羽淑『藤原定家の歌風』（桜楓社、1985年）第3章第6節「イメージ」
- 生澤喜美恵「物語の風景を心に浮かべて——藤原定家」（山本一編『中世歌人の心 転換期の和歌観』世界思想社、1992年）

### 第3章

- 安井重雄『藤原俊成 判詞と歌語の研究』（笠間書院、2006年）II・第6章「俊成判詞「不可庶幾」評の規制——定家・家隆を中心に——」
- 本間民子「「ながめ」の語義の変遷について」（『日本文学ノート』第5号、1970年3月）
- 内田敬子「勅撰集における「ながめ」その基礎的資料」（『立教大学日本文学』第29号、1972年12月）
- 吉田雅子「和歌的「ながめ」の再吟味」（『女子大国文』第70号、1973年8月）
- 赤羽淑『藤原定家の歌風』（桜楓社、1985年）第2章第6節「正治・建仁期の歌境」、第3章第4節「空間」
- 北山正迪「「ながむ」覚書」（『国語国文』第38巻10号、1969年10月）
- 平沢竜介「万葉から古今へ——視覚表現を通して」（『白百合女子大学研究紀要』第27号、1991年12月、後に『古今歌風の成立』（笠間書院、1999年）に所収）
- 近藤みゆき『古代後期和歌文学の研究』（風間書房、2005年）第1章第2節「「見渡せば」と「眺望」詩」
- 大取一馬『新勅撰和歌集古注釈とその研究』（上）（下）（思文閣出版、1986年）
- 和歌文学大系9・中川博夫『新勅撰和歌集』（明治書院、2005年）

生澤喜美恵「歌語「むなしき空」考——中世和歌の風景——」（『同志社国文学』第32号、1989年3月）

川平ひとし「軒に夢みる——中世和歌における〈視点〉」（『國學院雑誌』第92巻1号、1991年1月、後に『中世和歌論』（笠間書院、2003年）に所収）

中川博夫「京極派和歌の一面覚書——〈軒〉をとおして」（『徳島大学国語国文学』第5号、1992年3月）

佐藤雅代「「ながめわぶ」試論——和歌表現にみられる特性について——」（『表現研究』第60号、1994年9月）

風巻景次郎『新古今時代』（塙書房、1955年）

谷知子『中世和歌とその時代』（笠間書院、2004年）

谷知子「文治六年女御入内屏風と和歌」（『玉藻』第36号、2000年5月、後に『中世和歌とその時代』（笠間書院、2004年）に所収）

小嶋菜温子「ながめ」（『王朝語辞典』東京大学出版会、2000年）

渡部泰明『中世和歌の生成』（若草書房、1999年）第3章第1節「序文をめぐる」

山本章博『中世和歌の研究 寂然・西行・慈円』（笠間書院、2016年）序章「中世初期の和歌と仏教——その研究史」

## 終章

風巻景次郎『新古今時代』（塙書房、1955年、後に『風巻景次郎全集』第6巻（桜楓社、1971年）に所収）「萬葉古今新古今三集の定位」

折口信夫「短歌本質成立の時代」（土岐善麿編『萬葉以後』（アルス、1926年）、後に『折口信夫全集』第1巻に所収）

谷宏「玉葉集論序説——新古今集と玉葉集と——」（『国語と国文学』第16巻第9号、1939年9月）

朝山信彌「玉葉風雅と新古今——覚書——」（『国語国文』第9巻8号、1939年8月）

谷宏「玉葉集の歌風と萬葉・新古今」（『国語と国文学』第17巻第7号、1940年7月）

佐佐木治綱「新古今集と玉葉集——中世和歌史構成上の一問題」（『国語と国文学』第27巻第8号、1950年8月）

関守次男「玉葉集叙景歌の発生事情」（『山口大学文学会誌』第8巻2号、1957年12月）

次田香澄「中世に於ける純自然観照歌の発達」（『国語と国文学』第15巻第12号、1938年12月）

片野達郎「『玉葉集』・『風雅集』の叙景歌——その写実的性格と絵画との関係——」（『文芸研究』第42号、1962年9月、後に『日本文芸と絵画の相関性の研究』（笠間書院、1975年）に所収）

糸賀きみ江「玉葉集における新古今歌人の位置」（『共立女子短大紀要』第10号、1966年

- 12月、後に『中世の抒情』（笠間書院、1979年）に所収）
- 錦仁「〈風景〉をうたうとき——中世和歌への視点——」（『文学』第3巻2号、2002年3月）
- 鈴木日出男「赤人の叙景の構図」（『成城国文学論集』第12輯、1980年3月、後に『古代和歌史論』（東京大学出版会、1990年）に増補所収）
- 武田元治「「見様」考——定家十体の内——」（『大妻国文』第11号、1980年3月）
- 村尾誠一「朦気を払う歌 藤原定家『毎月抄』における「景気」の歌をめぐって」（『東京外国語大学論集』第42号、1991年3月）
- 大岡信「叙景歌の抒情性」（川本皓嗣編『歌と詩の系譜』中央公論社、1994年）
- 大坪利絹「京極歌風の問題点」（『語文（大阪大学）』第29号、1971年5月、後に『風雅和歌集論考』（桜楓社、1979年）に所収）
- 錦仁『中世和歌の研究』（桜楓社、1991年）第2篇第2章・2「〈せば—まし〉歌の消滅」
- 渡部泰明「風景表現研究の行方」（渡部泰明・川村晃生編『歌われた風景』笠間書院、2000年）
- 野田浩子「〈叙景歌〉の成立へ」（『万葉集の叙景と自然』新典社、1995年）
- 吉岡曠「作者のいる風景」（『武蔵野文学』第14号、1967年2月、後に『作者のいる風景 古典文学論』（笠間書院、2002年）に所収）
- 久保田淳「源経信の和歌について」（『山岸徳平先生頌寿中古文学論考』（有精堂、1972年）、後に『中世和歌史の研究』（明治書院、1993年）に所収）
- 錦仁『中世和歌の研究』（桜楓社、1991年）第2篇第1章1「叙景的表現と詠作主体の変質」
- 岩松研吉郎「窓の周辺——京極派歌風的一面」（『芸文研究』第46号、1984年12月）
- 川平ひとし「軒に夢みる——中世和歌における〈視点〉」（『國學院雑誌』第92巻1号、1991年1月、後に『中世和歌論』（笠間書院、2003年）に所収）
- 中川博夫「京極派和歌の一面覚書——〈軒〉をとおして」（『徳島大学国語国文学』第5号、1992年3月）
- 安田徳子『中世和歌研究』（和泉書院、1998年）第1章第1節・2「旅人のいる風景——中世的表現の形成——」
- 川平ひとし「〈心〉のゆくえ——中世和歌における〈主体〉の問題——」（『国語と国文学』第81巻第5号、2004年5月、後に『中世和歌テキスト論——定家へのまなざし』（笠間書院、2008年）に所収）
- 伊藤典子「玉葉集叙景歌に関する一考察——そのパノラマ的側面——」（『国文鶴見』第30号、1995年12月）
- 岩佐美代子「京極為兼の歌風形成と唯識説」（『創立二十周年記念鶴見大学文学部論集』1983年3月）、後に『京極派和歌の研究 改訂増補新装版』（笠間書院、1987年）に所収）
- 池田美枝子「《景》のゆらぎ——「喩」としての力——」（『古代文学』第47号、2008年3月）
- 池田美枝子「〈景〉と〈情〉——後期万葉の歌表現」（『これからの国文学研究のために

池田利夫追悼論集』笠間書院、2014年)

付論

吉澤義則編『未刊國文古註譯大系』第7冊(帝国教育会出版部、1937年)

大川茂雄・南茂樹編『國學者傳記集成』第2巻(國本出版社、1934年)

## 論文の内容の要旨

和歌史において『新古今和歌集』は一つの到達点とも言われる。『新古今和歌集』成立前後の「新古今時代」と称される時期には、様々な表現上の試みがなされた。新古今時代については歌人、歌壇史、そしてまた表現史といった各種の論点から先学の論考の蓄積があるが、現在、研究は「新古今時代」を和歌史に定位し直すために再検討が必要な段階を迎えていると言える。特に新古今時代にのみ集中的に見られ、以後の和歌史に定着しなかった新奇な試みについて分析していくことは、新古今時代の特性を定位するに有効な視点であると考えられる。

本論では「新古今時代」の上限を、「新儀非抛達磨歌」と呼ばれる新風和歌の試みが推進された良経家歌壇の活動が開始する文治5年(1189)に、下限を『新古今和歌集』の切継作業が終了したと推測される承元3(1209)～4年までと定め、この時期の和歌を対象に論考を進めるものである。

第一篇では藤原良経を取り上げた。藤原良経は新古今前夜の歌壇主宰者であるとともに自身歌人でもあった。旧来それぞれの面に着目した論考はあったが、この二つの側面を統合する視点を創出することで、藤原良経という人物を新古今時代に正しく位置づけ、またそのことを通して新たな「新古今時代」像を立ち上げることができるのではないかと考え、論考を進めた。この二つの側面がこれまで結びつきづらかった一因として、良経歌壇の和歌行事の本文の多くが散佚してしまっていたということがあった。そこで第一篇の付章「藤原良経の歌壇活動」では散佚本文の収集と整理を行い、特にその歌題設定という面に着目し、良経歌壇では時間を一つの素材として扱う傾向が顕著であること、それは後鳥羽院歌壇へと受け継がれていくものであるということを明らかにした。

第一章では良経歌壇の最初期から名を連ねている寂蓮に着目し、寂蓮の歌が良経詠に表



現の面でどのような影響を与えていたのかを検討した。良経はその初学期に寂蓮の和歌における特殊な表現やことばの配置を摂取しているが、とりわけ寂蓮の特徴の一つである構図の巧みさに関して学ぶところが大きかったものと思われる。また寂蓮の和歌における構図は起点が明確なところにその特質があるが、この特質は京極派の和歌へとも流れ込んでいるのではないかということ指摘し、表現の面から和歌史における寂蓮の位置づけの見直しを図った。

第二章では藤原良経の和歌に頻出する「風」という素材に着目し、良経が詠歌の中で風のような機能を担わせていたのかを検討した。良経の詠作では特に「風」という素材の持つ時間経過を演出する役割が重視されている。このことは、良経歌壇の歌題設定において時間そのものを詠歌素材として捉える傾向が顕著であることとも連動している。「風」は『新古今集』の中心を占める重要な素材となったが、そこには良経の生涯にわたる試みが大きく寄与しているということ明らかにした。

第三章では、新古今時代、藤原良経周辺の歌人に集中的に見られる「心の空」という表現を取り上げ、院政期以降に流行する「心の〇」という表現の中でどのような位置にあるのか、また以後の和歌表現史に定着しなかったのはなぜかということ、 「心」を「景」でどのように表していくかという和歌における根本的な問題の中に置き、この問題を説明する際に先行研究で用いられることの多い「心物対応構造」の枠組みを踏まえながら検討した。そして、ある「景」を心情の比喻として提示するということは和歌が始まって以来幾度となく繰り返されてきたが、新古今時代の和歌では「景」がそのまま「心」の喩として機能せず、「心」と「景」との間にずれや懸隔が生じていること、そして「心の空」という表現の創出の背後には、その齟齬自体を歌おうとする姿勢があることを明らかにした。

第一篇の論考から、良経歌壇と藤原良経の和歌に共通する問題として「時間」と「叙景」という問題が抽出された。そこで、第二篇・第三篇では「時間」と「叙景」の表現の問題を新古今歌人全体に押し広げ、検討することとした。

第二篇第一章では新古今歌人の和歌に特徴的な素材として「春の曙」を取り上げた。「春の曙」は「秋の夕暮」と並び賞される美的観念の表象として馴染みが深い、和歌にこのことばが詠み込まれるようになるのは院政期頃からであり、勅撰集では『千載集』が初出と、存外に遅い。それが新古今時代には用例が急増する。特定の時間そのものを主題とすることは、その時間に特定の和歌的イメージを認めたということであり、言い換えれば歌ことばたりうるだけのイメージの蓄積がなされたということである。

「春の曙」という時間帯はこれまで「艶」と結びつけて論じられることが多かったが、新古今歌人の「春の曙」詠の検討を足がかりにこの語にイメージが蓄積していく経過を辿ると、この時期さまざまに試みられていた「心」をどう詠むかという問題との関わりが強いと言えるところでは結論づけた。

第二章では「むすぼほる」ということばの語義を問い直すことを通じて、新古今歌人たちが和歌の中に「時間」をどのように詠み込んでいったかを検討した。新古今歌人たちの用例と平安期の用例を見比べると、一見正反対の意味合いに見えることが多いのだが、これは「むすぼほる」と歌われる対象の違いに起因する。新古今歌人たちは輪郭のないはかない景物に好んで「むすぼほる」の語を用い、さらにそこに「むすぼほれゆく」「むすぼほれつつ」のように幅のある時間を表す「ゆく」「つつ」を付し、はかない景物が消失へと向かう過程における危うさ・不安定さを描くことを主眼としている。

第三篇では叙景表現が新古今時代の和歌においてどのように機能しているかということを経験的な角度から検討した。

第一章では古注以来その解釈の定まらない藤原定家の「年も経ぬ祈る契りは初瀬山尾上の鐘のよその夕暮」という一首の表現を掘り下げ、「よその夕暮」という箇所自身と「景」との関わり方、言い換えれば「心」と「景」との関係性が端的に示されているのではないかという見通しのもと論証を進めた。

そもそもどの角度から見ると、「よそ」となりうるものは変化する。すなわち、「よそ」の問題とは言い換えれば視点の問題でもある。そして「よそ」という表現は心の喩となるはずの景からはじき出された作中主体、という俯瞰的な視点をも提示することを可能にする語であり、第一篇第三章で扱った「心の空」という表現同様、「景」と「心」とのずれや懸隔を描くことばであったと結論づけた。

第二章では新古今時代に盛んに行われた『源氏物語』撰取の一例として藤原定家の「吹きまよふ萩の上風むすぼほれ秋に閉ぢつる暮の空かな」という歌を取り上げ、新古今時代に流行の様相を呈した『源氏物語』取りが、新古今歌人たちの叙景表現にどのような影響を与えたのかを一首の読解にこだわることで掘り下げた。一首の中に複数の『源氏物語』由来のことばを取り込んだ当該歌では、撰取されたことばが『源氏物語』での用法とは意味をずらされていること、主体が定まらないこと、『源氏物語』の巻全体の情調を取り込んでいることなど、様々な原因によって部分がそれぞれ拡散していく。そのため固定された角度から読み解くことは不可能であるのだが、このことは定家が『源氏物語』との距離を保とうとして意

図的に演出したことなのではないかと結論づけた。

第三章では新古今時代の和歌に見られる「ながむ」ということばの機能について分析した。『古今集』以来、幾度となく歌に詠み込まれてきた「ながむ」ということばは、時代が下るに従って少しずつ視覚優位の意味合いに変化していくことが言われているが、その過程で釈教歌における用例が出現していることに注意が払われるべきである。釈教歌における「ながむ」は単なる視覚の問題として片付けられるものではなく、仏教的な思想を基にした心のありよう、そしてまたその姿勢による外界の景の捉え方と言い換えられるだろう。すなわち、「ながむ」という語の意味合いの変遷は、「景」と「心」との関係性、言い換えれば「見ること」と「思うこと」との関係性の変化を反映したものと言え、このことは叙景表現の問題全体へと繋がるものである。

また付論として、東京大学総合図書館が所蔵する『月清集攷』の書誌調査・翻刻を掲載した。『月清集攷』は藤原良経の私家集である『秋篠月清集』の注釈書で、江戸時代の国学者岡本保孝の手になるものである。現在その存在が確認できるのは、国立国会図書館蔵本、京都大学附属図書館蔵本、そして東京大学総合図書館蔵本の3本である。ここでは3本の本文を対校した上で、この書物がどのような注釈態度に基づいているかについて検討し、保孝自筆本である可能性が高いことを指摘した。

以上本論は新古今時代の和歌について、藤原良経を足がかりに、「時間」と「叙景」という二つの問題点から考察を行い、和歌史における「新古今時代」の位置づけの再検討を図ったものである。